



聖学院 中学校  
高等学校



女子聖学院 中学校  
高等学校

## 「誰一人取り残さない」世界の実現を目指して



SDGsを教育プログラムとして学習に取り入れる意義

**加納** 「誰一人取り残さない」世界の実現を目指すという動きが広がり、定着しつつある中、それを自分事としてどう受け止めるのか。私たちが身近に行えることは何かを考える行為自体が、生徒たちにとって非常に意義深いものだと思います。

**児浦** そうですね。資本主義社会に生まれ、育つ生徒にとって、特に男子に顕著なのですが環境や社会という枠組みよりも、経済に目を向けがちで環境破壊などについて関心が薄かったり、身近な問題として捉えにくかったりする傾向がありました。しかし、SDGsの17の目標について、そのどれもが何かしら自分と



各校各園の  
相互理解を深め  
ダイバーシティーを  
具現化

聖学院中学校・高等学校  
広報部長・21教育企画部長・  
国際教育部長  
児浦 良裕

女子聖学院中学校・高等学校  
英語科教諭  
加納 由美子

つながるものであり、社会・経済・環境のそれぞれの結びつきを理解し、体感できると、彼らの考え方や行動は大きく変わってきます。

**加納** SDGsをプログラムに取り入れる前から、本校には「主なるあなたの神を愛せよ」と「あなたの隣人を愛せよ」から汲み出された「神を仰ぎ人に仕う」というスクールモットーに基づいたプログラムが多く展開されています。「他者のためにどう考え、どう行動するか」を教育に盛り込んでいくことは、学院の創立当時から脈々と受け継がれてきた本校の特長だと感じています。

**児浦** 本校の教育理念とSDGsの「誰一人取り残さない」という目標は非常に相性がよく、学校行事などにその考え方を取り込みやすかったのも事実です。平和学習や環境教育、社会課題解決学習など従来から続けてきた本校の取り組みはSDGsとリンクし、その概念が教師や生徒の間にも自然と浸透していききました。

男子校、女子校の枠組みを超えたパラスポーツプロジェクト

**児浦** SDGsの取り組みの中でも、聖学院中高と女子聖学院中高の有志生徒が参加して活動を行っているパラスポーツプロジェクトは、学外からの注目度も高く、生徒たちの熱意と工夫でどんどん進化しています。

**加納** はい。プロジェクトが立ち上がったのは2017年の秋でした。最初のステージでは、パラスポーツを知ること、そして、その魅力を届ける映像の作成を行いました。2つ目のステージでは、パラスポーツの応援を体験すべく、生徒たちといろいろなパラスポーツの大会に出向きました。例えば選手たちが音と声のコミュニケーションを頼りにゴールを目指すブライインドサッカーを応援するには、声を出さない応援方法を考える必要があり、障がいを持つ選手たちに「どう届けるのか」が問われます。

**児浦** 3つ目のステージでは、これまでの気づきを生かして高齢者や福祉、誰もが安心して

暮らせる街づくりなど、社会課題への貢献に発展していきましたね。特にパラスポーツ競技を使うと高齢者の健康促進を図ろうという生徒たちのアイデアと行動力には感心しました。

**加納** 高齢者向け施設で、入居者の方々とボッチャを一緒に楽しんだのですが、社会福祉協議会などへのヒアリングから施設へのアポ取りまで、手探りながら一歩ずつ形にしていきました。イベントは大成功で、先方から「またぜひ一緒にやりたい」とお声がけいただいているほどです。

**児浦** プロジェクトのホームページやロゴマークも生徒が自分たちで制作しています。ロゴの赤と緑と青はさまざまな個性を持った人が共存していること、プロジェクト名の下の赤いラインは生徒たちの熱意



聖学院は、2023年に創立120周年を迎える。100年を超える学院の歩みのさらなる先を見据え、2018年には長期ビジョンの策定を行った。そこでは「誰一人取り残さない」世界の実現を目指すことが宣言されており、SDGs達成を推進するグローバル・コンパクトに署名・加入している。根底にあるのは、「神を仰ぎ 人に仕う」という精神だ。「誰一人取り残さない」世界の実現を目指して、という宣言は画一的なものではない。各校各園で発達段階があるため、それぞれの個性と多様性を生かしながら「誰一人取り残さない」あり方を実現していく。

幼稚園・小学校・中学校・高校・大学がそれぞれの個性を大切にしながら協働していこうという現場の機運も高まりつつあり、相互理解が深まってきている。各校各園からそれを実感するという教職員の声も多くあがっている。多様性を認めながら包括する、まさにダイバーシティーが学院で具現化され、地域、日本、そして世界へとつながっていくことを目指す。



School Information

聖学院中学校・高等学校 SEIGAKUIN JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 URL: https://www.seig-boys.org/

女子聖学院中学校・高等学校 JOSHI SEIGAKUIN JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 URL: https://www.joshiseigakuin.ed.jp/

身近なところから一歩ずつ

「誰一人取り残さない」を生徒たちが体現していく

学校法人聖学院 取り組み

聖学院中学校・高等学校

▷ 高校カンボジアMoGを実施

聖学院中高は2019年夏、グローバル教育の1つのプログラムとして、NPO法人very50との共同企画プログラム「高校カンボジアMoG」を実施しました。MoGとは、「Mission on the Ground」の略で、SDGsのテーマを用い「問題解決能力」の育成に重点を置き、チェンジメーカー（社会起業家）のもとで現地でワークを行うことをメインとした海外研修プログラム。2019年は28名の生徒が参加をし、カンボジア貧困層の自立実現を目指すナチュラル素材雑貨メーカー「Rokhak（ルッカ）」と女性起業家が立ち上げた女性の雇用機会促進のための、女性ドライバーによるカンボジアツアーを運営する「Lavender Jeep（ラベンダージープ）」のソーシャルベンチャー企業2チームに分かれて、それぞれの課題解決に取り組む活動を支援しました。



▷ SDGs Cooking Innovation Labを実施

2019年11月、クックパッド株式会社、静岡聖光学院中高とのコラボレーション企画を実施しました。ジェンダー平等の問題をテーマに、クックパッドのキッチンラウンジを会場として、中高一貫の男子校の生徒たちが実際に料理を作り、レゴを使って「料理したくなる世界」について考えました。この企画の前には、聖学院中高を会場に、「世界の台所探検家」クックパッドの岡根谷実里氏による講義とワークショップを実施しました。



▷ 中高生ソーシャルデザインコンテスト優勝！

2019年7月に開催されたりディラバ主催の「R-SIC（アールシック）」という社会課題をテーマとしたカンファレンスの初日に

行われた「中高生ソーシャルデザインコンテスト Field Adventure AWARD 2019」に聖学院高校の生徒のグループが参加し、高校1年の全生徒が参加する2泊3日のスタディーツアー「ソーシャルデザインキャンプ」での活動、プレゼンテーション内容をもとにした発表を行い、見事優勝を果たしました。

女子聖学院中学校・高等学校

▷ SDGsフォトコンテストを開催

女子聖学院は、ワークショップなどで「SDGs」という言葉を冠したプログラムも実施していますが、日常の授業を通して環境や人権の問題などを学んでいることも特色の1つです。2019年度は6月に中学2年生を対象として、SDGsフォトコンテストを実施。優秀な作品3点を選出し表彰を行いました。SDGsと関わりのある写真を、中学2年生を対象に募集したところ、生徒の約半数となる63点の作品の応募がありました。応募時に、作品にSDGsの17のどのゴールと関わりがあるのか、ゴールの番号を記入してもらったところ、一番多かったのはSDG15の「陸の豊かさを守ろう」でした。

▷ 「理科」をテーマに日本各地を見学する理科見学旅行

理科見学旅行は中2～高3を対象とした課外プログラムで、理科の視点で地球資源や環境課題の探求をしています。このプログラムがスタートしたのは1970年。実に50年の歴史を持つ女子聖学院の理科教育の象徴です。旅行当日の学びを深めるため、10回以上の事前学習を行い準備をします。物理、化学、生物、地学の4分野の要素を必ず入れることがこのプログラムのこだわり。地学は大学入試で重視されていませんが地球規模の社会課題とつながる科目として大切にしています。2019年は環境先進都市、北九州市の再生可能エネルギー施設の見学などを行いました。



女子聖学院中学校・高等学校

▷ 英語スピーチコンテスト

このコンテストは女子聖学院で30年以上続く英語教育プログラムの1つ。予選を勝ち抜いた高校1～3年生までの9名の生徒が、自分たちの経験や問題意識を英語でスピーチします。2019年度のテーマの多くは、人種問題や環境問題、SNSで他人を中傷するコメントに対する警鐘など、社会課題と深く結びつくものを取り扱われました。スキルとしての英語力のみを競うのではなく、「自分は何を伝え、何を解決したいのか」を問う中で、生徒一人ひとりが誰一人取り残さない社会への関心を深めるコンテストとなりました。

聖学院小学校

▷ 会ったことのないクラスメイトを支えるために

世界で小学校に通えない子どもたちは約6,100万人（出典：ユニセフ世界子供白書）います。家族の経済的な問題だけでなく、教育への理解や子どもの健康への関心、地域のさまざまな問題が複雑に絡み合っています。聖学院小学校では日本国際飢餓対策機構が推進するチャイルドサポーター制度に賛同し、2016年から支援を開始しました。対象となる国はバングラデシュ、カンボジア、フィリピン、ボリビアです。学年ごとに1名のチャイルドを支援します。自分の誕生日に献金を送り、クリスマスカードを交換して交流を深めています。サポートするチャイルドは同じ年齢で、学年が上がってもそのまま支援を継続します。それぞれ遠く離れてはいますが、子どもたちは会ったことのないクラスメイトに毎日思いをはせ、支える活動を行っています。



聖学院大学

▷ 食べることで子どもたちの笑顔を増やそう

2019年12月9日（月）～12月23日（月）のウィークデーに、学生食堂でのSDGs寄付メニューを通して、途上国貧窮児童への学校給食支援を実施しました。このプロジェクトは「食堂寄付メニュープロジェクト学生メンバー」が中心となり、株式会社レバスタの協力のもと学生×大学のコラボレーションで実現しました。学生食堂の売上金の一部を国連WFP（World Food Programme:世界食糧計画）に寄付する仕組みを利用した、SDG2「飢餓をゼロに」の実現に向けて誰でも参加できるアクションプランです。

▷ SDGs、ダイバーシティをテーマとした公開講演会

SDGs及びダイバーシティを主題とする公開講演会を、政治経済学部主催のもとで実施しました。2019年11月には東日本大震災被災地で地域活性化に関わる宝来館女将の岩崎昭子氏と国連WFPの大室直子氏、2020年1月には国際移住機関（IOM）の佐藤美央氏による公開講演会を実施。学生や地域の方々と共に、SDGsにつながる取り組みについて学びを深めました。

▷ よいさっ！プロジェクト

大学内に設置されたボランティア活動支援センターに集う大学生が中心となり、2019年8月が6回目となる復興支援ボランティアスタディツアー「よいさっ！プロジェクト」を実施しました。聖学院大学学生、聖学院中高生に加え、自由の森学園の高校生もツアープログラムを企画。地域の方々との交流や、「釜石よいさ」では障がい者団体と連携して出店、復興公営住宅での花植えを行いました。



ハラさせられるシーンもありました。しかし、車いす使用者との目の合わせ方や耳が聞こえづらい方との会話方法などを、生徒たちは交流する中で自然と身に付けていくのです。

加納 イベントの目的であった高齢者の健康促進も大切ですが、まずはそういった小さな場でもよいから機会をたくさん増やしたいという思いで、少しずつ活動を広げているところです。

児浦 そうした成功体験を重ねると生徒たちは、そばにいる友人の個性やよいところも認め合うようになっていきますね。最初は「あの子は全然話を聞いてくれない」と女子に憤然とされていた生徒が「話は聞いていないけど、本番をまとめる力がすごい」となったり。

加納 お互いの居場所づくりや役割分担も上手になりましたね。学外でのイベントを企画・実施する中で、自分たちの仲間に対しても意識や気持ちが高くなる。生徒の内面に「誰一人取り残さない」という考え方が芽生えてきていることを実感しています。

加納 生徒たちは、高齢者施設でのイベントを通して、「そういえば街なかを見回しても、高齢の方々と私たちのような中高生が交流できる機会や場所ってないよね」と気づくわけですね。家族以外の高齢者とコミュニケーションをとる機会が日常では極めて少ない。しかし、イベントであれだけ楽しんでもらえたのだから、そういう機会をもっと増やすべきではないかと、模索し始めています。

児浦 パワフルな中高生の高齢者に対するコミュニケーションのとり方に、始めはハラ

考え、行動することで見えてくる新たな課題と進むべき道



プロジェクトロゴマーク

が込められています。加納 コンセプトもデザインも、大人顔負けで本当に驚かされました。